

科学技術政策担当大臣と有識者議員との会合 議事概要

- 日 時 平成21年11月26日(木) 10:00～11:45
- 場 所 合同庁舎4号館742会議室
- 出席者 古川副大臣、津村政務官、相澤議員、本庶議員、奥村議員、白石議員、榊原議員、今榮議員、青木議員、金澤議員、藤田政策統括官、梶田審議官、岩瀬審議官、大江田審議官
- 議事概要

議題1. 優先度判定等について

<須藤参事官説明>

- (津村政務官) ◇ 大変多くのパブリックコメントが集まってきているが、これをどの程度反映できるのか。また、それが結果としてどのように見えてくるのか。
- (須藤参事官) ◇ パブリックコメントを踏まえてどう対応したかという点については、最終的な優先度判定等がまとまった段階で説明資料を作り、それを公表することを考えている。
- (相澤議員) ◇ パブリックコメントにおいて、直接的に評価をこうすべきというところまで具体的に言っている人は少ないので、評価のランクづけを変更するまでの影響はないのではないかと。例えば、可能なものについては、有識者議員のコメントに反映することが考えられる。

議題2. 最先端研究開発支援プログラムについて

<相澤議員説明>

【新規プログラムの目的】

- (相澤議員) ◇ 名称は「最先端・次世代研究開発支援プログラム」とする。

【対象とする研究者】

- (榊原議員) ◇ 今回のプログラムは、若手と女性ということを政策として明確に打ち出しているのだから、女性はこれだけ確保するという枠をきちんと決めるべき。
- (相澤議員) ◇ 窓口を一本にする場合に、男性については年齢制限を設け、女性については年齢制限を設けないこととなる。その際、若手という枠で上位から採択していった中に、女性でかつ若手の年齢制限を越えている人が入ってきた場合の取り扱いをどうするかという問題がある。
- (本庶議員) ◇ あまり複雑なことはせずに、例えば女性を30%取るということだけをはっきりしておけば、年齢は関係ないのではないかと。
- (今榮議員) ◇ 女性の中には、女性だから選ばれたということを出してほしくないという人もいる。そういう意味で、入り口を一つにして審査の段階で考慮するという今回の提案は非常にリーズナブルである。
- (相澤議員) ◇ 対象は、若手研究者と女性研究者とし、若手研究者については年齢制限を設け、

女性研究者については年齢の上限は置かないこととする。選考のプロセスは、一定比率のところまではピアレビュー等の結果による序列をそのまま尊重し、あとの何%かについては、地域性、性別等の配慮をする。その際、女性については全体として一定の目標値に達するようにする。発表する場合には、女性枠であるということとは表現しないこととする。

(本庶議員) ◇ 女性の比率の目安については、データに基づいて決める必要がある。

(津村政務官) ◇ 女性の比率と地域性の定義については、現状をよく分析していただいた上で、複数の案を提案いただき、もう１週間かけて議論してもいいのではないかと。

政策として女性、地域についてアファーマティブアクションをするのであれば、ある程度、誰から見てもわかりやすい姿が必要である。

【対象とする研究】

(相澤議員) ◇ グリーンイノベーションと健康研究を推進することを目的とした研究を対象とすることとする。

【支援規模及び支援件数】

(金澤議員) ◇ 申請者はほとんどが上限の金額で出してくるので、３５０件という支援件数は多いように感じられる。

(相澤議員) ◇ ３００件を目安とすることとしたい。

【実施体制】

(金澤議員) ◇ 最先端研究開発支援プログラムと同様で、外国人レビューを入れる必要はないのではないかと。

(奥村議員) ◇ このプログラムが外国に報道されるときに、日本人だけでやるというのでは、世界最先端という名前にそぐわない。外国人レビューを入れるべきである。

(榊原議員) ◇ 審査の過程で、グローバルに見てこの研究がどういう位置づけにあるかという視点で見ることとすればよく、その判断は日本人で十分できる。全体の効率を考えても日本人だけでやればよい。

(白石議員) ◇ 「最先端」なのだから、プロポーザルは英語で書けるべきだし、「次世代」という観点からは、世界の最先端を走っている人にレビューしてもらえれば、プログラムをいいものにする上では非常に有効なので、入れるべきである。

(本庶議員) ◇ 英語で概要を書くのはかなりの力量があるので、ここで一つバリアを設ければよい。あまりに応募件数が多いと審査する方も大変である。

(相澤議員) ◇ 外国人レビューの意見を参考にすることとし、そのため、応募書類の根幹にかかわる部分については英語での提出を求めることとする。

議題３．その他

＜津村政務官より科学技術振興費の状況及び事業仕分けの結果が科学技術関係予算に及ぼす影響について説明＞

(榊原議員) ◇ これまで行われた事業仕分けの結果は、あのチームでの結論であって、最終的には政治主導で決めていくということによいか。

(津村政務官) ◇ 事業仕分けの結果を１００％に近い形で尊重するということも、逆にワンオブゼ

ムという扱いをすることもあり得るが、そこは今後政治判断が下りるということである。

- (白石議員) ◇ 事業仕分けの対象となった予算は、かなりの減額という結論が出されており、今後、同種のものについては財務省の予算査定で同様に削減される可能性もある。そういう状況で、我々がS A B C評価を行っても、一番良くて現状維持で、そうでなければますます減額されることになりかねず、総合科学技術会議としてこれでいいのかという懸念を持っている。総合科学技術会議が集中投資した方がいいと判断した部分について、それを実現するような仕組みを作ることが必要ではないか。
- (奥村議員) ◇ 概算要求が出た後にS A B C評価を行うのではなく、要求以前に主要な施策について把握し、場合によっては統合するなどの作業を行って、そういった施策群に優先的に資源配分をするようなプロセスにしなければ、総合科学技術会議の機能は極めて限定的になる。
- (相澤議員) ◇ 例えば、グリーンイノベーションを最重要政策課題として政策誘導するならば、グリーンイノベーションについて、国全体として大枠の予算を決め、それに対して各省が応募し、総合科学技術会議が優先度判定を行うということにすれば、実効的に進むのではないか。

(以 上)